

社会科分科会

座談会：附属岡崎中学校の社会科授業から学んだこと

社会科教育講座	船尾日出志
大学院社会科教育専攻	栗田泰大，谷田真理子，水野晋作 増田美寿々
大学院発達科学専攻	櫻井貴大，田中裕子，水野恭子

はじめに

平成 24 年 6 月 16 日（土）に愛知教育大学附属岡崎中学校で「平成 24 年度，生活教育授業研究会—ともに授業について語る会—」が開催された。公開された授業のうち社会科の授業は，鈴木秀和教諭が指導した「二十七曲がりがもたらす繁栄」（2 年 D 組）と稲吉直樹教諭が指導した「兵士たちにとっての硫黄島」（3 年 C 組）であった。平成 24 年度前期の土曜日に開講していた大学院の授業科目「社会科教育特論Ⅳ」の 7 名の受講生に，可能ならばその 2 つの授業のどちらかを観察し，授業後の協議会にも参加し，学ぶように指示した。幸い，わたしの指示に受講生の全員が応じてくれた。わたし自身は熟慮の末に，「二十七曲がり」をみることにした。何となく「硫黄島」の方が，参観者が多くなると予想したからである。予想は当たり，7 名の受講生についていえば，2 人が「二十七曲がり」を，5 人が「硫黄島」をみた。



【二十七曲がり】



【硫黄島】

その後，7 月 7 日および 14 日の社会科教育特論Ⅳの授業において，6 月 16 日に参観した授業をめぐって座談会を行った。この報告はその座談会の記録である。司会は船尾が務めた。

1. 授業「二十七曲がりがもたらす繁栄」をめぐって

司会：「二十七曲がり」を参観したのは谷田さんと水野恭子さんの 2 人だけですね。もっとも，わたしもまた参観したのですが。まず愛教大の学部から直進で大学院社会科教育学領域に来てくれた谷田さんから，この授業の指導計画を説明していただきましょう。

谷田：指導案に書かれた指導計画によれば、本時の目的は3つあります。第1に岡崎城下の繁栄ぶりを明らかにすること、第2に現在の二十七曲がり周辺の姿と比較して、商業の中心が、二十七曲がり周辺から大型商業施設に移ってしまったことに目を向けさせ、その原因をさぐること、そして第3に現在の二十七曲がり周辺にかつての賑わいを取り戻す方法を追究することです。「二十七曲がりもたらす繁栄（探究から）」という単元は14時間完了ですが、わたしたちが参観した授業は8時間目です。

司会：9時間目以降で本格的に「現在の二十七曲がり周辺にかつての賑わいを取り戻す方法を追究する」ことになるのですね。

谷田：そうです。生徒たちはそのきっかけを得る授業が本時です。

司会：水野恭子さんは現職の幼稚園の先生ですが、附属岡崎中学校の授業をご覧になってどんな印象をお持ちになりましたか。

水野恭子：授業が始まる前に、すでに教室に入ったときに気づいたことがあります。教室の壁には、二十七曲がりについて自分の興味・関心によって資料やインターネット、聞き



取り調査をもとに調べてきたことが貼られていました。内容としては岡崎二十七曲がりとの比較のために「箱根七曲がり」や「彦根七曲がり」を調べたもの、そして「二十七曲がりと岡崎の産業」、「二十七曲がりと田中吉政」、「二十七曲がりと花火」などさまざまでした。自分の興味や仮説にたいする根拠など調べるなかでまとめられており、個々の学びを一覧でき、他の子どもたちもこれを見ることによって多角的に学びを深めたり、自分の

興味や関心のある事柄を深めたりすることができると思いました。また付箋によって友だちの調べてきたことにコメントがなされており、そのような工夫も、自分の調査内容に他者からのフィードバックがあり、有意義な学びにつながっていると感じました。

司会：なるほど。1時間の授業は子どもたちの学ぶ過程のごく一部でしかないということですね。もちろん重要な一部ではありますが。では実際の授業展開について、この授業をみていない人たちにも分かりやすく話していただきましょう。

谷田：水野さんの方が詳しい記録をとっていらっしゃるのので、最初に水野さんをお願いします。

水野恭子：はい。最初に鈴木先生が「二十七曲がりが存在していた頃の岡崎の繁栄」と板書され、そこから生徒の発表が始まりました。最初に指名された生徒は、岡崎の繁栄が岡崎藩主となり、都市計画を担った田中吉政の業績であると意見を表明しました。矢作川が側にあり、渡し船が主流で、旅館が115軒あり宿場町として栄えたことや、当時5万人の人口のうち武士が1500人おり、武士の生活用品が売られ、鍛冶屋や工具屋が65軒に及んだこと。また愛教大の名誉教授...

司会：新行紀一先生ですね。

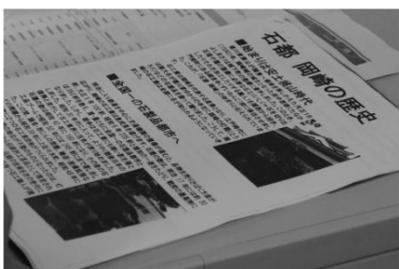
水野恭子：そうです。その先生に取材したグループは OHP を使って江戸時代の岡崎の風景



を映し、二十七曲がりには城に攻め込まれないように防衛の役割を果たしていたことを発表していました。他の視覚的発表では円グラフにして、伝馬町の職種別の割合を出して印象づける生徒

や「二十七曲がりガイドブック」により黒板に地図を貼って、宿場町として栄え、現在でも伝馬町では備前屋や永田屋を代表とする店や問屋が残っていることを発表する生徒もいました。多様にプレゼンテーションが行われていました。

その後、岡崎の伝統産業の代表的な八丁味噌のカクキュウの取材でわかったこと、特に矢作川の水害の難を逃れ、空襲の被害がなかったこと、高温多湿な気候もあって味噌が作りやすかったことで、カクキュウが現代でも続いていることが発表されました。また伝統産業に関連して、岡崎では御影石が採れたことから、田中吉政の配慮もあり、江戸時代から



石工業も栄えたこと。現在では、中国の安い石材に押されているが、町おこしや CD の販売、イメージキャラクターなどで PR し、伝統工芸品をアピールしていることも発表されま

した。さらにロウソクについて「磯部ろうそく」から取材した生徒は、和ロウソクの原料は「はせの実」で、琉球から九州にわたり、日本特有のものであること。八丁味噌と違って、有名ではないが、むしろそういう産業にも国は積極的に補助金を出すべきだと主張する生徒もいました。さらに、東海道を渡ってくる人々はお金が足りなくなると、自分が地方から持ってきた特産物を持って糧にしていたことも町が発展した要因ではないかという洞察を披露した生徒もいました。

そのような生徒たちから発表された意見をふまえて、鈴木先生は「岡崎二十七曲がりの賑わいを取り戻す方法は？」という発問を投げかけました。それにたいして、岡崎の商店街（現在の康生町）のドーナツ化現象を例にあげ、大型スーパーやイオンなど郊外が栄えていったことで空洞化が起こり、中心街がさびれたことを説明する生徒や、「便利になったのであり、自分にはまったく不便もないし、仕方ないこと」と冷めた意見を述べる生徒もいました。しかし「イオンの一角に伝統工芸品、和ロウソクや味噌を売ってはどうか」という提案する生徒もいました。そこで時間となり、今後深めていくという確認で終了しました。

司会：ありがとうございます。本当に丁寧な説明でしたね。

水野恭子：船尾先生に、授業研究では何よりしっかり記録を取ることが大切だといつも言われているものだから...

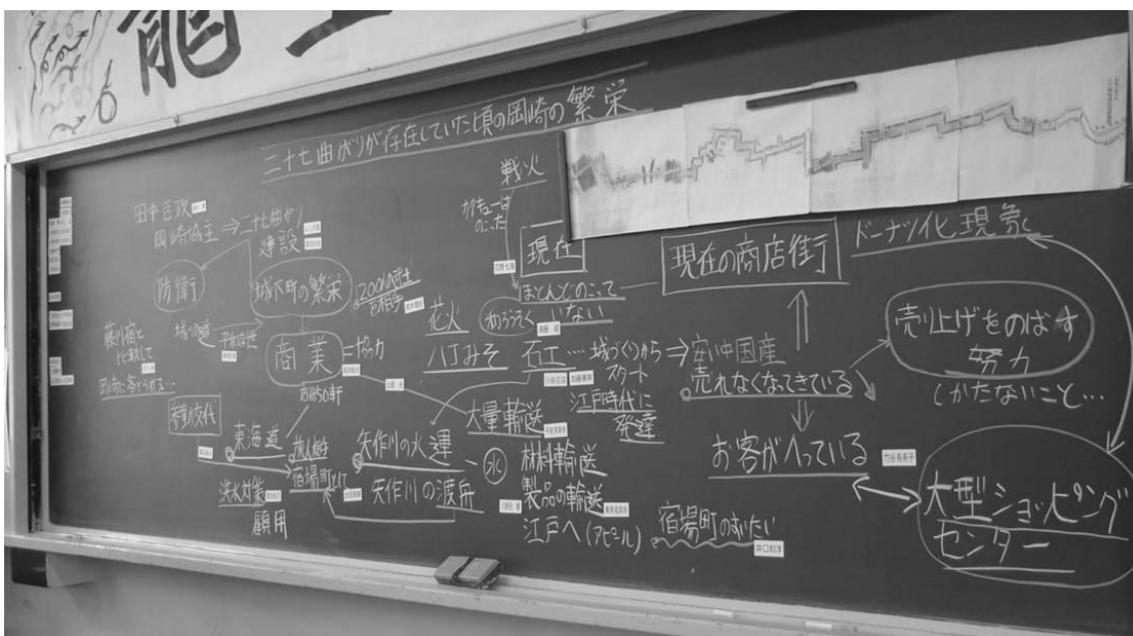
司会：なるほど。谷田さん、今の水野さんの授業展開についての説明に関連して、何か意

見がありませんか。

谷田：そうですね。鈴木先生の指導、支援について言えば、3つのことが印象的でした。第1に「板書をそのままノートに写す必要はないよ。メモ程度でいい。それよりも友だちの発言をしっかりと聴こう」と呼びかけていたこと。第2になるべく多くの生徒に発言の機会を与えていたこと。第3に授業の流れを作るために生徒を意図的に指導なさっていたこと。

司会：確かに「子どもありき」の授業ではあるのですが、しかし根本のところでは教師の支えなしでは、決して授業にならない、つまり生徒たちが思考を展開して、認識を深める授業にはならないのでしょうか。ところで谷田さんは鈴木先生の板書に注目していましたね。

谷田：はい。最後に次のように黒板が書き尽くされました。結果として、向かって左から右に時間が流れるように巧みに板書がなされていることに注目しました。



司会：遠慮しないで、もっと詳しく説明してください。

谷田：控えめな性格ですので。ではお言葉に甘えて、説明させていただきます。黒板に向かって左上の田中吉政から始まり、右側に進むにつれて現在の商店街についての板書になっています。左から右へ時間軸がのびており、岡崎の盛衰の様子がこの板書一枚にまとめられました。また関連するものを線で結び、因果関係も分かりやすくなっています。たいへんよくまとまった板書だと思いました。

さきほども述べましたが、鈴木先生はなるべく多くの生徒に発言を求めようとなさっていました。附属岡崎中学校のスタイルとして、授業の流れを作るために、ある程度は指名順序を決めてあるように思いますが、時間軸に沿って意図的にキーワードを出させたのが功を奏したのだと思います。

司会：最後に、観察させていただいた授業について思うことを、ぜひ話してください。

水野恭子：教師と生徒のやりとりでは、なかなか意見がまとまらない子どもに対しても、決して止めたり、途中で教師が出たりするのではなく、温かいまなざしでの見守りがあり、生徒の思いを最後まで表現する場の保障がありました。それが、生徒が伸び伸びと発言す

る姿につながっていたのだと思います。うまく思いを伝えきれない生徒には、最後に言いたいことを「こういうことだよ」と共通認識につなげ、授業を展開させていく配慮があったように思いました。

谷田：授業後の協議会で鈴木先生は『産業』と『商店街』という2つの素材を設定したことで、焦点がぶれ気味だった」と反省なさっていました。わたしはその点について気にならなかったです。「安井中国産が流入していることによって、日本のモノが売れなくなっている」という発言や「中国は日本の真似ばかりしている」という少々過激な発言もみられるなど、生徒が岡崎だけでなく、日本全体の問題として捉えていることが垣間みえました。ただ「現在の商店街はこのままでいいの？」という発問に、「仕方ない」、「ぼくは困らないから良いかな」などの発言が出てきたのは、教師にとって予想外だったと思います。「なぜ仕方ないと思うのか」、「本当に衰退したままで良いのか」と掘り下げて、生徒たちに今一度、衰退の問題をみつめさせるのも面白いかなと感じました。

司会：ありがとうございます。いい意見だと思いますよ。

2. 授業「兵士たちにとっての硫黄島」について

司会：次に稲吉先生が指導された3年生の授業について話し合っていきましょう。現職の幼稚園教諭である田中さんは、附属岡崎中学校の授業をごらんになったのは初めてですか。

田中：中学の授業をみる機会はありません。初めてとってよいほどです。その分、新鮮でした。日頃みている幼稚園の子どもたちが、どんな中学生にあるのかな、附属の中学生のように育つのか、などと想像しながら観察させていただきました。

司会：もう少し詳しくお話いただけますか。

田中：当日、いただいた資料には、中学校3年間で育てたい子どもの姿は『学んだこと』→『行動につなげる』→『成長し続ける』：学んだことを行動につなげるなかで成長し続ける子どもであるとされています。そして社会科がめざす姿は「未知なる社会事象に向き合い、社会や自分のあり方を探り続ける子ども」とし、より具体的には「今まで知らなかった事実に目を向け、情報を多面的に考察し」、「情報を整理する中で、何が解決すべき課題であるかを見極め」、「自分が気づけなかった事実や情報の解釈と出会い、新たな見方や考え方を獲得し」、「社会の形成者として、自分と社会のかかわりを意識し、問題解決に取り組もうとする」生徒が育つことを重視されています。

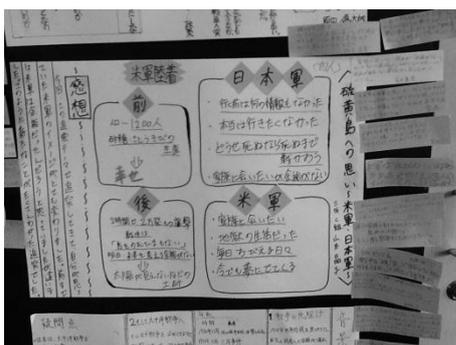
学校教育法の第3章（幼稚園）の第23条の三で、「身近な社会生活、生命及び自然に対する興味を養い、それらに対する正しい理解と態度及び思考力の芽生えを養うこと」と幼稚園教育の目標が規定されています。幼児期は何よりも楽しさを求めて活動をおこなう時期です。幼稚園では遊びを通して楽しさや面白さを感じつつ、さまざまな物事を体験することを大事にしており、その楽しい活動の過程や結果として学びが成り立っています。そうした学びと関連して、集中する力や持続させていく力などを身につけながら、生活を充実させています。わたしも、これからはいっそう先を見据えて「今何を学ぶべきか」と問いながら、学校教育としての学びの連続性を確かなものにしていきたいと思っています。

司会：熱い思いに感銘を受けました。櫻井くんも現職の幼稚園教諭ですね。男性の幼稚園の先生もこれから増えていくと思います。櫻井くんも附属中学校の授業は初めてですか。

櫻井：初めてでした。驚きました。授業のなかで稲吉先生は基本的に板書、指名のみでした。次々と発言する生徒を中心に展開する授業に驚きました。

司会：なるほど。次に授業の目標や実際の展開について水野晋作くん、簡潔に説明していただけますか。

水野晋作：はい。硫黄島における日本軍とアメリカ軍の戦いについて、その戦いの激しさや軍事上の位置づけを知った子どもたちが、死を覚悟してなお戦い続けた兵士の思いについて興味をもち、個々人で追究を行ってきた生徒たちの意見を交流することで、新たな課題を生み出していくことが今回の授業の目標でした。観察させていただいた授業では、硫



黄島の戦いから兵士の思いについて焦点を絞り追究を行った結果を発表することが主要な活動でした。その中から兵士たちの家族への思いや未来への思いに気づき、そのような兵士たちの思いを今後は自分たちが未来に残していくことが新たな課題として設定される計画だったのです。

←「追跡交換ボード」で生徒は自分の追究をこのようにまとめていた。更に、他の生徒の追究に対して付箋を用い自分の意見を貼ることで授業の始まる以前から意見の交流をしていたようです。(付箋の色・・・青が賛成、黄色が中立、赤が反対を示します)。

授業はある生徒の「家族に会いたい。今はもううらんでもない。今でも夢に見る」という硫黄島の兵士の思いの紹介から始まりました。教師は黒板の中央に日本兵と黄色の文字で板書し、「日本兵の思い」が話題の中心になるように位置づけました。次に別の生徒の栗林中将についての発言が続きました。ここまでは兵士の思いに関する発言であったが、ここから3人ほど硫黄島の戦いの背景やアメリカ軍の日本に対する意識などについての意見が続き、黄色の文字で米軍兵の項目が日本兵の下に板書されました。その後、再び栗林中将についての意見が述べられましたが、その後はしばらく、とりとめのない意見が続きます。結果としてはこの時間が長かったために、最後に出てきた未来への思いを伝えていきたいという生徒の発言についての議論に時間を割くことができなかつたのは残念でした。

司会：なるほど。栗田さんと増田さんは生徒の発言を丁寧にメモしてくださいましたね。どちらか皆さんに紹介してください。

増田：じゃあ、わたしの記録を紹介します。生徒の発言が次々出てくる授業でしたので、生徒の発言を順番に、番号をつけて、紹介しています。

①兵士たちは戦争に行くことを不安に思っていた。しかし周りからは祝入営といって、送られていった。表向きは華やかであったが、裏向きでは本当は戦争に負けるのではないかという不安があった。

②星条旗を立てた人々のその後について。戦争はアメリカ兵からも日本兵からも心を奪った。また、経済的なもの、領土を奪っていった。

③戦争の狙いと、硫黄島を守る狙いについて。硫黄島は日本とアメリカ双方にとって重要な位置にあった。また、日本は硫黄島の戦いに負けた時点で、戦争自体に負けたと認めるべきであったのではないだろうか。

④アメリカにとって硫黄島は中継地点として利用するのに必要であった。日本にとっては最後の砦であり、空襲が来るぞという時に備えられた。だから日本にとっても進行を遅らせるために硫黄島の戦いは必要な戦いだった。だから、意味のある戦いであった。

⑤アメリカ兵は日本人をどう見ていたのか。戦時中アメリカ人は日本人のことを「イエロー」や「ジャップ」という侮辱的な呼び方をしていた。今はそのような呼ばれ方をしていない。なぜならば、アメリカに住んでいた日本人がアメリカ人として戦争に参加し、アメリカ人に見直されたからである。だから、在米日本人にとっても、戦争は必要だった。(在米日本人の思い)

⑥(⑤の意見に対する反論) 元々アメリカと日本は対立関係ではなかった。日本のアジア進出で利害対立をするようになった。全く個人的に恨みのない人同士で、殺し合いをすることに疑問を感じる。

☆⑦栗林中将が戦後どのような未来を望んでいたのか。栗林が書いた決別電文から、私達は何を学ぶべきかが大切である。考え方やこれからの日本がどう進むかといった考え方を学びとるべきであって、戦争どうこうではない。

⑧情報操作について。人々は終戦後に、上からの情報が嘘だった時がついた。

⑨捕虜になった人について。アメリカ軍は捕虜となった人々を大切に扱った。これは可哀そうでも仕方なかったからだろうか。それに対し、日本人は731部隊に代表されるみたいに、捕虜に対して酷い実験をした。なぜこのような酷いことをしたかという、小林という人が「戦争だからだ。」と言った。日本はまだ戦争に対して、償いができていない。

⑩調べて捕虜になった人はアメリカ人を恨んでいないということが分かった。なぜならば命の恩人だから。お互い許したというより、時間もたち恨みとかがなくなったのではないだろうか。

⑪(⑩に反論して) 時間がたったというけど、個人的恨みを持つ機会自体そもそもなかった。目の前にあることを全力でやっていて、とにかく、敵兵を殺していたのだ。自分のことすらわからないのだから、なおさら相手のことなど分からなかったはずだ。

⑫国内混乱によって、自分のやっていることが正しいのかわからない。情報がなく、上司がすべてであった。また戦争に対して政府が責任を取り切れていない。

⑬太平洋戦争のきっかけについて。パールハーバーはF.ルーズベルトが日本を挑発して、反日感情をあおった。この事実についてアメリカは認めた。しかし日本は挑発に乗ったと認めていない。日本政府は日本国民が分かるように説明すべき。増税→国家予算→軍事費→戦争誘発…。

⑭身体・精神的について。過去のことは変えることはできない。だから私たちは生きさなくてはならない。引き継いでいかななくてはならない。

⑮前に出てきた、差別の話に戻る。

⑯沖縄で行われていた残虐行為について。

⑰十四歳で海軍に入隊した人の話。戦争に行く前は自分の命はどうでもいいと思っていた。しかし実際戦争に行くと家族のことを思った。また何を思って戦友は死んでいったのだろうと思うようになった。戦争があったから、今の日本がある。そう思うのならば、戦争について考えなくては、伝えていかななくてはならない。

⑱兵士は戦争がどういうものか考えられなかった。目の前のことで精いっぱいであった。

(※発言文中の下線部は兵士の「思い」に追った発言と思われる部分である。)

司会：ありがとうございます。栗田くん、補足していただけますか。

栗田：ほぼ同じですが、授業の後半に未来志向的な考え方を表明した生徒たちがいました。

司会：たとえばどんな発言ですか。

栗田：そうですね。「戦争は悲惨、それを未来につなげる必要がある、戦争の事実だけではいけない、家族の人の気持ちだとか昔の人の気持ちだとか...」、「亡くなった人の命を無駄にしてはいけない、硫黄島は知られていない、戦争があったから今の日本があった、兵士に感謝」というような発言です。しかしそれらの発言は、本当はもっと授業の前半で、少なくとも中盤で出てきてもよかったと思います。

司会：なるほど。

櫻井：先生、その関連で、わたしからも補足したいのですが。

司会：もちろん、どうぞお願いします。

櫻井：ありがとうございます。本時は「兵士たちはどんな思いで、戦っていたのであろうか」に焦点をあて、事前学習で調べてきた内容をもとに話し合いを進められました。そのなかで、元兵士やその遺族などの戦争体験者の未来に対する思いに気づき、「戦争が薄れつつある今、私たちこそが戦争に向き合い、兵士の思いを記憶し、伝えいく必要がある」という新たな学習課題につなげていくというものでした。その意味では、栗田くんが述べたように、未来志向的な考え方がもっと早い段階で出てくるのが稲吉先生の願いであったように思います。

司会：ということはこの授業は失敗とまではいわなくても、上出来ではないということでしょうか？

櫻井：いえ、わたしはそのようには思いません。すぐに教師が答えを示すのではなく、生徒たちが分からないながらも自分たちで答えを見つけ出そうとする姿を辛抱強く「見守る」という援助ができていたのではないかと感じました。これは本時の授業という短い時間で見れば、十分に学習課題を達成できなかったことになるかもしれませんが、長い目で見れば社会科のカリキュラムにある3年生の3学期の「将来の社会や自分のよりよい姿を求め、その実現に向けて見通しをもって動き出す」という「子どもの姿」につなげていくために必要な経験だったと考えられます。その証拠に授業の時間内だけにとらわれずに、授業後に生徒同士で個人的に議論を継続していく姿から、生徒の追究が深まっていく様子を伺うことができました。教師というと「指導」や「援助」をするもので何かをしなければならぬと考えがちですが、子どもたちの力を信じて「見守る」という援助が、長い目で見れば子ども達の力を伸ばしていくことにつながると気づかされた授業でした。

司会：すでに櫻井くんから授業にたいする感想、評価をいただきました。最後に、稲吉先生の授業にたいする感想を順番に述べてください。

増田：わたしの授業記録のなかの☆⑦のところをみてください。生徒の発言に対して稲吉先生がもっと積極的に反応をお返しになっていたら、特に☆⑦のところがポイントの発言であり、授業の流れの軌道修正ができる役割にあったと考えられるのですが、また教師と生徒の対話が、もう少しあったら良かったかもしれません。ただし櫻井さんの「待つ姿勢の大切さ」に関するご意見をお聞きして、少し考えが揺さぶられています。

司会：栗田くんお願いします。

栗田：はい。生徒の発言と本時の課題「兵士たちはどんな思いで、戦っていたのだろうか」を比べてみると、米軍・米国の気持ちにまで派生し、また、戦争に対する否定的な心情が

芽生えている様子がわかりました。また、各々の調べ学習がハイレベルであったため、かなり深い内容までたどり着く生徒が多数みられます。その中で、未来志向的な考えが多くの中生徒の中に芽生えていました。そこから、前時までの教師の生徒に対する働きかけの工夫や努力がうかがえます。しかし、授業構想段階では、「兵士・家族の思い」をまとめ、「未来の戦争に対する思い」について話し合うというものになっていたが、実際の授業ではそれらが並行して述べられているため、各々が、調べ学習の結果とそこから感じたことを発表しているだけにとどまっているように感じました。稲吉先生は、生徒が他の生徒の発言から問題意識を深め、授業を展開させようとしていたようですが、教師の発問がもっと有効に用いられるべきだったのではないかと思います。ただしわたしもまた、櫻井さんの先ほどのご意見にあったように「待つ」ことも大切なのかとも思います。また勉強しながら、考え続けることにします。

司会：水野くん。

水野：わたしは、稲吉先生が作成された板書について述べたいと思います。板書にも工夫



が見られました。中央に「日本兵」と黄色の文字で書いたのに加えて「家族」、「米軍兵」などの重要なテーマとなりうる単語が並べられています。黒板に向かって右側には、当時の日本の様子などの兵士たちが戦場に送り出された背景が書かれています。そして向かって左側には兵士たちの未来への思いや、伝えたいことが板書されています。つまり、兵士の思いを中心として過去から未来へと繋がる思いが黒板に表されているのです。

今回の授業では、生徒の自己調査の内容の深さと多様さが印象に残っています。その多様さのために授業としてはまとまりにくかった面もありますが、無理にまとめようとはせず、生徒に任せたことで生徒たちの興味は深まったように思えました。その証拠に、先ほど櫻井さんもおっしゃったように、授業が終わっても生徒は周囲と意見の交換をしており、強制的に下校させられなければ何時までも続いていたのではないかと思うほどでした。このようにしっかりした興味をもち追究できるのは普段の学習からそのような訓練ができているからだと思うし、またそうであるならば、この後の授業でもしっかりと課題をもって追究していくことができるだろうと思えました。

司会：最後に田中さんお願いします。

田中：みなさんの意見に重ならないことを言います。追究交換ボードで3色の付箋紙で賛成(青)、反対(赤)、中立(黄)を交換することで、お互いの考えや追究内容を知ること

が出来ると思いました。しかしその取り組みは素晴らしいとは思いますが、青の付箋がたくさん貼られている生徒、赤の付箋が目立つ生徒、付箋が貼られていない生徒など多様でした。個に応じた配慮はなされているのでしょうか。

司会：活発なご意見、ありがとうございました。今回の学びもまた今後の大学院での研究に生かしていただければ幸いです。

まとめにかえて

授業参観後の語る会で、わたし（船尾）は1点についてのみ述べた。すなわち教員は生徒たちの追究活動を規制していないという点である。もちろん教員がバックアップ的支援をなさっていることは分かるし、必然的でもある。しかし生徒の意識においては、自由に追究活動を楽しめているのではないだろうか。個人追究も可能だし、グループでも可能だし、追究対象も、追究方法も多様性が保障されている。岡崎の二十七曲がりの歴史に関して新行紀一先生（愛教大名誉教授）に取材したグループについて質問したところ、鈴木秀和教諭から次のような説明があった。

「生徒たちはネットで岡崎の歴史について詳しい人物を検索した。すると愛教大の新行先生の名前があがってきた。そこで愛教大の事務職員に電話をし、趣旨を告げたところ、『新行先生はすでに愛教大を退職なさっている。連絡先を教えてください』との返答があった。そして新行先生に直接、電話でお話しをしたところ、わざわざ中学校まで来てくださった」。

ダイナミックに広がる学び、生徒たちが作る学びのネットワーク、それはひょっとしたら超時代的なネットワークになるのかもしれない。生徒たちの一生の宝物になるのかもしれない。



（二十七曲がりについて発表する生徒）



（岡崎の石工業に関する発表の様子）